

タイ国の社会的特性

前泰日協会学校シラチャ校（シラチャ日本人学校） 主任教諭
東京都目黒区立月光原小学校 主任教諭 荒井 崇 二

キーワード：シラチャ、仏教、進学率、教育

1. はじめに

日本人にとって、タイという国は、観光や料理で人気があり、親しみやすい国として毎年たくさんの日本人が観光で訪れている。そんなタイという国に派遣される機会を頂いた。タイには、日本人学校が2つ有る。1つは、首都バンコクにあり、2つ目は、バンコクから南へ1時間30分程行ったシラチャという町にある。私は、2つ目の在外教育施設、正式名称、泰日協会学校シラチャ校で3年間務めることになった。

任期の3年間で、日本では体験できないようなことをたくさん経験した。代表的なことは交流会である。現地の学校と交流活動を行い、お互いの理解を深めるとともに、友好を深めるものである。その交流会をきっかけに日本の教育とタイの教育の相違点や疑問を感じる場面がいくつもあった。ここにその概略を紹介したい。

2. 現地校からみたタイの教育と日本の教育の相違点 ～進学や就職にからめて～

学校段階

小学校 : 満6歳から満11歳まで
学年 : 第1学年から第6学年まで
在学率: 102.7% (2013年タイ教育省)

中学校 : 満12歳から満15歳まで
学年 : 第1学年から第3学年まで
在学率: 96.8% (2013年タイ教育省)

高等学校

学齢: 原則として満16歳から満18歳まで
学年: 第1学年から第3学年まで
在学率: 75.1% (2013年タイ教育省)

大学

学齢: 原則として満18歳から
学年: 第1学年から第4学年まで
在学率: 46.5% (2013年タイ教育省)

タイの高等学校における在学率は75.1%と、日本に比べると高くはないが、在学率は年々上昇してきている。なお、タイにおいては、無試験で入学することができるランカムヘン大学（学生数約36万人）、スコータイ・タマティラート大学（学生数約16万人）という2つの公開大学が国民に対して広く高等教育の機会を提供している。

タイの方に実際に話を聞いてみたところ、小学校6年生までは、子どもを通わせなくてはならず、これを怠る

とその親は捕まってしまうということだった。つまり、タイでは、ほぼ100%の子どもが小学校に通っているということである。そして中学校への進学も小学校とほぼ同じでそのまま中学に通うということであった。進学率が若干落ちてくるのが、高校である。高校に通う生徒は、それでも多いが、高校に通うか、専門学校に通うかという選択に迫られる。高校に通う生徒は、7割～8割で高校に通った生徒は、そのまま大学へ行くという子が多いようだ。

タイの人たちには、「まずは大学を卒業する」という意識が高く、進学率は高いと言えるだろう。

しかし、これは世界共通ではあると思うが、子どもの環境によってそれはいろいろと事情が変わってくる。田舎の農村地帯では、小学校にも通わせられない子がいたり、高校卒業後、または専門学校卒業後に働くという選択を迫られたりする子どもも多くいる。それでも、大学進学率が50%近くあるのは学業への意識が高いと言えるであろう。

日本の大学進学率が、40位で約63.36%（2018年は44位63.58%）である。これに対してタイは、60位の48.86%（2018年は64位49.29%）である。近隣のアジア諸国では、78位マレーシア38.53%（2018年は70位45.13%）、81位フィリピン35.75%（2018年は85位35.48%）、87位インドネシア31.29%（2018年は83位36.31%）、88位ベトナム30.47%（2018年は94位28.54%）と近隣諸国に比べると進学率も高くなってきている。

〈Global mote 国際統計HPより〉

また、タイの若者の人気の職業は、エンジニアリング、医者、パイロット、キャビンアテンダント、俳優、政治家といったものである。高収入な仕事にあこがれる一方で知識の壁も高い。医者にはあこがれるものの、やはりなることができるのは一握りということである。1位はエンジニアリングということで、製造業が多くを占めるタイのお国柄というか、外国企業の進出が多くある環境からこういった現状になると考えられる。タイの人たちは、英語はできなくても日本語はできる、とか韓国語ができるといったように外国企業で働くことができるように言語を習得する人たちも少なくない。また、周辺国から労働者も多く入ってきており、ラオス、ミャンマーといった国が多くを占めている。

タイの国の教育に対する考え方は、日本と大きな違いはないと感じた。すべての子どもに教育の機会を与えるという考えは、日本とタイも変わらない。また、学校制度も6・3・3・4を基本としており日本と似ている。義務教育は15歳までだが、タイは学歴社会なので、総じて就学意欲は高い。また18歳未満の年少者の労働は賃金的にも割に合わず、雇用者側も法的制限があって雇いづらいため、地方の農村に生きる人や、経済的に余裕のない家庭で育ったのでなければ、ある程度の学力、知能訓練を経ているといえる。

3. タイの仏教に対する宗教感について ～学校教育との関わりと関連させて～

タイでは、町の中を自然とお坊さんが歩いている。朝になると托鉢といって人々から食べ物をもらいに何キロも歩いていくのだ。タイの人々は、お坊さんにご飯などをささげて、お坊さんは人々や生き物全ての幸せを願うお経を唱える。また、こういった日常の事とは別に、仏教に関わる祝日や様々な仏教に関わる行事がタイ国内各地で行われている。このようにタイの生活と密接にかかわる仏教は学校教育とどのように関わっているのかを調査したことを記していく。

タイの小学校では、毎朝8時に朝礼があり、国旗を掲揚し、国歌を歌う。そのあとに読経を行うのだ。これはタイ国内の公立小学校全てで行われている。また、毎週木曜日は仏教にとって良い日になっており、児童は統一された白い服を着る。これは、瞑想を行うのに良いとされているか



らである。さらに、ウィットイーブットの一環として毎昼食後に10分間、毎週木曜日の14:30～15:00に読経と瞑想を行っている。これは、仏教の「瞑想をすると物事をよく考えて判断することができる」という教えに習ってのことだそうだ。ここでいうウィットイーブットとは、仏教の作法的な意味を表している。

このように日々の学校生活に仏教は密接にかかわっているのだ。こういった教えが継続して行われることで宗教心というものが根付いていくのだと感じた。

また、実際の授業の中でも社会科の分野に宗教という分野があり、タイの教員は全員が仏教を教えることができる。公立の学校には、すべての学校に普通にある。仏教が学校で教えられている理由は、いい人間になるために教えているということだそうだ。それは、仏教の教えである五戒に関わることで、

- ①生きているものを殺生しない。
- ②人の物を盗らない。
- ③酒を飲まない。
- ④うそをつかない。
- ⑤健全な男女関係を構築する。 というものである。

この教えに基づき心の育成をはかるということである。この教えにそった校訓もバーンノーク校では、設定されていた。笑顔でワイ（タイの伝統的挨拶）をしながらあいさつできる子・心の優しい子どもの育成。この2つの校訓も仏教の五戒に沿って考えられているのだ。

年間を通して調査してきた結果、仏教の国と呼ばれるタイは、やはり学校教育と仏教とのかかわりが密接にあることが分かる。しかし、事前に考えていた以上の関りがあることに驚いた。このような密接な関りがあるからこそ普段からタイの国民がその教えを理解し、祈りを捧げ、各行事に積極的に参加し、心優しい国民性、微笑みの国タイになっているのだと再認識することができた。日本人に仏教の方が多いとはいうもののタイのそれとは違い、普段からの生活、そしてその教えを学ぶ機会においては大きな開きがあると感じた。



4. 最後に

以上のように、日本とタイの教育の意識は、大きくは変わらない。むしろこれから発展をしていき、成長をしているタイのほうが学習意欲は高いのかもしれないと感じるほどである。バンコクには、多くの商業施設が並び、国内には多くの外国企業が参入している。その様子からもすごい勢いで発展をしていると感じる。これから先は、タイ国内に多くの国内企業が現れることを期待している。

タイという国は、日本人にとって非常に親しみやすく、「タイが好きだ」という日本人も多くいる。その背景の大部分には、タイの人々の人間性もあると思うが、日本と同じ仏教を推進していることや学校制度といった日本との共通点が多くあることもその要因だと思われる。

3年間の派遣期間を通して私自身、タイという国のことが今まで以上に好きになり、タイの人やタイの国のために貢献できるようなことがあったら、積極的に行っていきたいと考えるようになった。これからも日本人の多くがタイという国や人々、企業等と関わることでひとりでも多くの人が、タイという国を好きになってくれることを望んでいる。